

# 協同労働と人間の発達を求めて

ある小学校五年生の「演劇の授業」から探る。

協  
同  
の  
こ  
の  
こ  
ろ

荒木昭夫（京都府 / 協同総研顧問）

これは2001年11月19日からの4週間、120名の児童と共に行った「演劇の授業」からの私の実践報告である。

演劇の創造と言う「協同労働」に関わって、個々の児童とその集団がどのように発達するのか、を実地で検証したいとの念願をもって、私はこの

「授業」にいそいそと通った。児童とは大阪府箕面市立西南小学校五年生4クラスの子どもたちである。

何年か前から私は「協同労働」ということばに引き付けられて来ていたが、それは私が演劇活動を職業としてきたからである。

「協同」ということばは「ともに心と力を合わせ、助け合って仕事をする」と広辞苑にあり、この説明は何とも分かりやすい。そして初出は後漢書で432年ごろだと言う。何と卑弥呼の時代近くから「協同」ということばは使われて来ていたのだそうだ。



誰の目にも明らかのように「演劇」は、今も昔も「ともに心と力を合わせ、助け合って仕事をする」とでなければ成り立つものではなかった。

「演劇」という芸術行為にはまた常に「より良い質」の舞台創造が求められるし、自ら進んでそれを創造していなければ、すぐにも観客にそっぽを向かれ、職を失うと言う芸能なのである。

そしてまた我々「協同組合人」は常に「よい仕事」をなさんとし、21世紀の新しい働き方の一つとしてこの「協同労働」の協同組合法を提唱してきた。

協同とは何か。協同労働とはなにか。それはどのようにして組織され形成され、高揚されて行くのか。さらにまた協同労働が、どのような筋道で人間の発達に役割を果たして行くのか。

さて。協同労働と創造活動と人間の発達。この関係を具体的な例証で検証しなければならぬと演劇人である私は思い続けて暮らしてきた。そしてその日がやって来た。

小学校五年生、30人編成、4組、120人の児童たちと過ごした4週間の「演劇の授業」からこの課題を探るのである。(以下に記述する児童名はすべて仮名とした)

#### <発端と経過>

学校で、子どもたちが劇を見た。

「あの劇団の人らのように、何か、楽しく、やらせて欲しい」と子どもたちが言っている、と5年担任の教師たちが伝えて来た。さらに出来ることなら、「その子どもたちの発意を組み上げた劇が創れるものなら創りたい」との希望も寄せられて来たので、「その期待に応えたい」と私は思った。

私もまたこの「演劇的活動」によって、教室の中で「子どもが生き生きできるか、どうか」を確かめたい。さらに、子どもの「集団が生き生きしてる」ことを「一番気持ちのいいこと」だと考えているから、子どもの集団がそうなる道筋を確かめたいと思っていたし、

演劇を創出する手法が、その課題に対して、どのように機能して行くかを検証し、その経験を整理することで「演劇的手法による人間の発達」論に仲間入りしたい、と考えていた。

授業を始める二日前、私たちがやろうとすることをその担任教師たちに、先に生徒となって貰って体験していただいた。4クラスの担任教師4名の外に、「おもしろそう」と思われた3名の教師も参加された。講師として荒木昭夫、古川幸子、大原めいが参加した。かつて私が所属していた人形劇団京芸での同僚である。また先述した「あの劇団」の人として、劇団キオの石原夫佐子氏ら3名も見学された。

私の演劇の授業は「絵」を描くことから始まる。

「劇とは『劇しい』と書きます。激しく対立するものを、まず絵で描きましょう。例えば『火と水』だとか・・・。」と言って、後は4駒マンガのように絵を組み合わせて話を立上げるのである。

結論を先に述べよう。

我々の掲げていた課題 - 協同のある創造活動は人間を発達させる筈 - については、はっきりと成果を収めた。

確かに - 協同労働は人間を発達させ、その集団を楽しく創る - と。

以下に事例で説明する。

#### 《第1週》

公立小学校で行った私の最初の授業。

11/19(月)~22(木) 5年1組~4組 各クラス30人、午前中2時間の授業。3人を最小単位としての班編成。1クラスで10班を組む。

第1週は、「劇」とはなにか。と説明し、画用紙に「対立している」と思うものを描きつけ

る。例えば「猫と鼠」とか「鉛筆と消しゴム」とか。ここでは文字は書かない。描かれた絵を眺め、班ごとに相談しながら並び替えて、お話しに組み立てる。お話しに筋が通ったら、立ち上がって即興的に劇を始める。

第2週は、班編成を6人で組む。ナレーションは最小限度に留めること。班員の組み合わせで、まだうまく盛り上がってない所は、3人班を継続する。

- ここまでが(古典的な)劇ゴッコ遊びの踏襲であって、

第3週 劇の組立て。起・承・転・結について、それを体得させることを意識して、  
- 全体としては早くも到達したと判断して、

第4週 担任教師による指導に入る。  
と言う計画で進めた。

毎回、終了時点で全部の児童に「振り返りノート」を書かせておいてほしいと要請した。

教師たちの工夫で、次のような7段階評価の自己採点メモリつきノートが出来上がっていた。

- 振り返りノート -

自分の考えを友達に言えたか。  
だめだった 1 2 3 4 5 とてもできた

友達の考えを聞けたか。  
だめだった 1 2 3 4 5 とてもできた

友達と協力して劇を創ったか。  
だめだった 1 2 3 4 5 とてもできた

今日の活動を楽しんでできたか。  
だめだった 1 2 3 4 5 とてもできた

自分が良い劇だと思ったのはどれですか。  
その理由

- (1)  
(2)  
今日、自分たちの創った劇の出来栄はどうか。

子どもたち、全員がこれを書いた。熱心に書いた。自己評価もしっかり書いた。

他のグループの作品についても、評価をきちんと書いた。回を重ねる毎に、自己の作品に対する評価と反省は厳しくなっていた。それは真面目なもので、子どもとはこんなにも真摯な人達だったのかと、感動するものであった。

40個のグループができた訳だから、この紙面ではとても詳細には紹介できない。

ここではただ一つのグループの姿を追いかけるとしよう。例えば<川中学君、本松裕季さん、藤綾夏さん>のグループである。第1週ではすっかり出遅れ、第4週では一番拍手を受けたグループであったのだから。

《第1週》この時点では私にはまだ誰の名前も分からない。

「まず絵を描いて下さい。激しく対立していると思うものを」と私が呼びかけても、このグループでは何程も進んでは行かなかった。「なにか、描いてご覧」。時々は近寄って、声を掛けた。30分は過ぎた。他のグループではもうかなり進んでいるのに。ここにあるのは「猫と鼠」の絵くらい。

小さな女の子が、どうにか、小さな、ウサギの絵を描いた。可愛いウサギだった。大きな女の子が犬を描いた。簡単な線描きだった。男の子は、描かなかった。

「ねえ、何か、描いてよ」と私はその男の子に言い寄った。「ねえ、待ってるから。そうでなければ何も始まらないのだから」。この子も困った顔をした。

何か、示唆を与えねばならない。でなければ講師先生としては何もしたことになるのではないか。

「ああ、ウサギがいる。犬もいる。そうか。この人たちはどんなところに居るのかな？ うん。山に居る、とかねえ」。これは明らかに誘導である。「山でもかけよ。簡単なことじゃないか」と言わんばかりに。そして私はその場を離れる。離れた所からこの子らの動きを見る。何か始まりそうかなあ。

他のグル - プはもう配役を決めて、立ち上がって、それぞれに稽古を始めた。

10分ばかりの時間を置いて覗いて見た。男の子は山を描いていた。緑のクレパスで、細かい線で、一線で、しるしばかりの。

この男の子は、このクラスの中でも一番体の大きい男の子じゃないのかな。確かにそんな男の子だった。だのにどうだ、この線の細さは？ 大丈夫なのかな、と顔を見た。それともこの「劇づくり」と言う「授業」を嫌がっているんじゃないのかな。でも、ここはやってもらわなきゃあなあ。このグル - プだけが立ち上がれなかったって言うんじゃないあなあ。

で。言った。「山にはね、生き物がいっぱい住んでいるんだよ。それに岩もあるしね、ごつごつと」。暫く離れて、見て見ると、確かに山は、緑の色に塗られてあった。

「ああ」。やっぱりこの子はここまでか、と私は思って、担任の先生にこの子の名前を聞

いた。「ああ、川中君ね」。教師も心配はしていたようだった。だからもう一人体の大きな女の子をこのグル - プに付けて居たようだった。その子の本松さんと言うらしい。

強引に30分遅れで発表にもって行ったが、このグル - プの子どもたちは、まだ何をしていたのかも、分かっている様子は見えなかった。ただ困ったままで立ち止まると言う次第だった。題名を付けるとするなら「ウサギと犬」か。お話しを述べるとするなら「山に動物が住んで居ました。いろいろ、なにか、していました。おしまい」。と言うことになる。

《第2週》前回のものを仕上げよう、と言う課題にした。

前回の山の絵のことはよく記憶していたので、今回は吸い寄せられるようにこの子らの班に近寄った。猫、鼠、ウサギ。そしてこんどは豚が居た。

そうか。この動物たちが居て、山へ行ったとして……。でもなぜ山へいったの？ と水を向けた。少しの間が空いた。「捨てられたんかなあ」と私がつぶやいた。とたん、二人の女の子の目が光った。で。「豚か。豚が山に居るかな」と問えば、「猪！」と返ってきた。後のテンポは早かった。つまりここは、野生のものたちの生き方だった。

お話しはこうなった。「捨てられた者たち」。

犬と猫が居た。捨てられた。山へ行った。猪がいた。

猪に山での暮らし方を教えられた。ウサギを引き裂いて食べるということ。

眠り方も教えて貰った。起きた時の挨拶の仕方も。「お早う！」。

講師古川は「あの川中君は体がとっても動

くらしい。だから早くなにか体を動かしたい様子やった」と観測していた。この日、絵はもう描かなかった。

《第3週》このグル - プに別の3人が加わって6人班となった。

動物の絵がどんどん描かれていた。川中君はライオンの絵を描いていた。こんなに動物が居るところはと言えば、そこは動物園か、アフリカか。

今度は川中君がアフリカの絵を描き出した。真っ黒のクレパスで、ぐいぐい、ぐいぐいと、アフリカの空を飛ぶ鳥たちの絵を描いた。何と言うことだ、こんなにも力強い絵を描く子どもだったんだ。

まとめると、その題名は「動物園」。

象がアフリカへ戻りたいと考えた。動物園を出て行くのなら僕も行きたいと、ライオンも考えた。檻を破って象たちは出た。キリンも誘った。

ライオンはカメと仲良しだったから、カメに別れの挨拶をした。象は配慮なくカメを踏んづけて歩いた。ライオンは怒って象の鼻をひっちぎった。これではアフリカへ行けないと、象もキリンも動物園へ戻った。一人ぼっちとなったライオンも、仕方なく動物園へ戻った。

創るお話しがどんどん複雑になってくる。今回は話を纏めて行くのに苦労していて悶えていた。川中君も前回の猫の役では役割が分かっていて、良く生きていたが、今回のライオンではセリフが出てこなかった。確かにこれは難しい役だ。まだ全様が胸に落ちていない、という状況だったのだろう。それでも川中君は、そのセリフを自分の体の中で探しているのであろうと思った。アフリカに住む動

物の絵はしっかり描き込んでいる。だからもう少しの事だ。彼の体のなかでイメージが孵化しかかっている、その時間の問題か。

我々はまた、じっと待つこととした。

《第4週》子どもたちはもう、すっかりふっ切れたようだ。はや集団はできあがっていた。

題名は「おばさん」。

ス - パ - マ - ケットでの出来事である。

「あいよ、あいよ。半額の大売り出し！」と店長が大声を張り上げる。お客がどんどん来て大賑わい。そこへ「おばさん」がやってきて「もっとまからんか」と詰め寄る。

「いやあ、これ以上はまけられません」と店長が言う。

「分かっているがな。けどまからんか」とおばさんが言う。

店長は引かない。おばさんも引かない。店長もおばさんもどっちも引かない。激しい対立。「そんなに値切るんやったら、もう買うてもらわんでもええ。出て行け！」と店長が叫ぶ。「ああ、買わへんわ。みんなも買わんとき。こんな店潰したるわ」と啖呵を切っておばさんは去る。

そして暫くしておばさんがやって来て「何や、この店、まだ潰れてへんのか」店長答えて「ああ、潰れてへんわい！」。

このお話しが出来上がった所で、この嫌な「おばさん」の役を誰がするのか、と大いに揉めた。そして、やっぱり止めようこんなお話し、と言うことになって、今にも消えそうになったその時、「私がやるわ」と引き受けたのは本松さんであった。

ここは自分がやらねばならないと思ったのであろう、彼女は既におばさんの、すっきりと成人されていたのであった。

即ち配役は、店長／川中君。おばさん／本松さん。お客／藤さん他。であった。

《さらに1週間後》

全体のまとめ会議でその小学校を訪れたとき、120人、一人ひとりからの手紙を戴いた。

ここで取り上げた3人の児童のものを紹介しよう。

川中学 初め、ねずみの役で、ぜんぜん意見を出せなかった。けど劇はうまく行っただとおもいます。2週間目は猫の役で、友達に意見を出せたと、恥ずかしがらずにできた。劇も長くできたし、自分でもうまい劇だと思った。3週間目は人数も多くなった。友達に意見も出せた。けど劇はうまく行かなかったと思う。4週間目は、僕は店長の役で、意見は出せなかった。けど後から言えた。劇もおもしろくできた。4週間、ありがとうございます。

本松裕季 劇づくりをして、初めのころの私は「自分」をあまり出せなかったと思います。でも4週間目、最後の劇では、頑張って「おばさん」という気の強い役を「自分を出す」という面で、頑張りました。わたくしに、この劇

で楽しめたと思います。友達の劇を見て、みんな頑張っていたし、私も「自分を出す」ということで、4週間劇をつかって、私は少し変わったと思います。みんなの前で劇を見せたり、他の人たちの劇を見る事を、この4週間、楽しみました。ありがとうございました。

藤綾夏 劇づくりをして、私は人の前に立つと声が小さくなるのですが、最後の劇では声が大きく出せたと思います。それと同じで、人前に立つと緊張していましたが、前よりかは、あまり緊張せずできました。初めは、劇作りは嫌だなあと感じていましたが、いまは劇を創るのが楽しみです。劇をしていて、友達がどうすればいいか、なやんでいましたが、後になってこれにしよう、こうしよう、自分で思っていることをどんどん言っていました。劇を教えてくれてありがとうございました。



《さらに2か月後》父母参観日に発表会。

2002年2月21日。120人の児童は、1、2、3、4組と言う通常の組分けにこだわらず、15名を1グループとしたテーマ別の8班に分かれて、8本の作品を発表した。指導したのは、4人の担任教師だった。作品の題名だけを紹介しておこう。それでこの子どもたちが何を考え、どんなテーマを探しているかが分かって戴けると思うからだ。1.「体のキズは消えても」、2.「未来の街へ」、3.「友達って何?」、4.「かわいそうな自然」、5.「あぶない学校」、6.「もとにもどりたい」、7.「ゆめ」、8.「戦争と平和」。

<まとめに>

ある日、それは第3週目の12/5(水)、この教室の授業を覗いて戴いた田中昌人教授(現・龍谷大学)の感想と発達にかんする階層の説明と一緒に聞いて戴こう。

田中昌人:10歳、11歳ですね。一枚の画用紙に他の子どもがどんどん描き込んで行きましたね。協同で一枚の絵を描く。これが集団的自己が確立されている証拠でした。あれはまさに発達の第3の階層から第4の階層へ向かって進む「飛躍の証し」でした。(注)値打ちは保って、表現は変える。つまり包容力がついているのです。

文章を読んで四季を感じる。四季を見て文章を創ることができる、という時期なのです。ピアジェは保存の概念が成立する、と言っています。値打ちを捉えて、捉えたから、自由に表現できる、ということです。そういう力です。それまでは力だめし。スポーツにおける記録だとかね。測定可能なものを目安にして、自分の力を確認していく。値打ちを捉えて、入れ替えることができる。

10歳で、要点をつかんで文章にできる。内容を捉えて創り出していくことができる。そういう時代なんですね。ですからこう言うときに演劇はとっても大事な役割を果たすんですね。変わり行く時ですから。自分の中に、自分とは違うものを入れて行くという体験。そういう時代。自分の中に自分を見る、そういう時代なんです。

内面の自分を育てる。その時代です。それができて、生活経験が広がっていく時代ですね。具体的な体験をして、書けるようになる。10歳では変わる時です。力だめしのような、測定可能なものをしっかり経験して、そしてその上で変わるのです。経験したことを書き、そしてそれを身近な人に分かって貰おうとして、それを表現します。

一つは自分の過去を照らして、自分の現在を見る。今一つに、自分はこうしたのに、人はそれを認めてくれない、とか、友達が見てくれていたとか、集団の中で自分を照らす。こういう位置付けの中で、集団的自己が育てて行くのです。この誕生が「飛躍の証し」です。

今日見てたのは、一人の男の子が描くと、見ていた女の子がずっと、その続きをその画用紙に描きますよね。またそのほかの子が、目玉を描くとかね。それまでは自分の絵だけを描いて来ていたのですが、テーマにふさわしいものを描けるということは集団的自己が確立したと言える訳ですね。ちょうどいい時に、よい教育をされていると思います。この一年間で自己開示できる時だと思っています。他人とのつながりを、骨太のつながりができて行く時だと思います。経験がなければものが描けないのです。

こうして私たちは、小さな体験を大きな体験へ移すことのできる展開を獲得した子ども

もたちの発達を確認した訳です。

集団的自己(注)が出来ていれば、やがてさらに多面的な集団的自己に進んで行くことでしょう。それは連帯を基礎にして価値を知って行く時期ですね。実際にこうして力のある子らに育って行く姿を、世間の人に知らせて行ってほしいですね。

このことばに励まされ、報告を書き続けた  
いと思う。

(注)発達の第3の階層 第4の階層 = 「人間  
発達の科学」 田中昌人著 青木書店

集団的自己 = 「子どもの発達と健康教育」  
田中昌人講演記録 かもがわ出版